

SER no.026; 序論

著者	中牧 弘允
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	26
ページ	3-9
発行年	2002-02-28
URL	http://hdl.handle.net/10502/1415

序 論

中 牧 弘 允

国立民族学博物館先端民族学研究部

はじめに

1. 民博における「弁当展」の展示構成と空間配置
 - 1) 8つの展示モジュール
 - 2) 展示モジュールのテーマ
2. 学習プログラムとボランティア活動からの命題と教訓
3. 学習プログラムとボランティア活動への展望

はじめに

全米日系人博物館の巡回展「弁当からミックスプレートへー多文化社会ハワイの日系アメリカ人ー」（以下、「弁当展」）が国立民族学博物館（以下、民博）で開催され、2001年4月19日から8月28日までの4ヵ月あまりにわたって、学習プログラムとボランティア活動が連動する形で展開された。日本における最初の巡回地であった沖縄県立博物館での開催期間が1ヵ月だったのに比べると、その4倍もの時間をかけて実践がおこなわれたことになる。本報告書に収められた4つの章の記述からは、その長さにもあう試行錯誤の軌跡を読み取ることができるであろう。

そこでこの序論では、本論の理解を助けるために、まず民博における「弁当展」がいかなる展示構成をとり、どのような空間配置で実施されたかについて、必要最小限の情景写真をまじえながら、簡単に紹介することにある。つぎに、民博における「弁当展」の実践からどのような命題や教訓が引き出せたかについて、簡潔に論じることである。そして最後に、民博や、ひいては博物館一般における学習プログラムとボランティア活動について、ひとつの展望を示すことである。

1. 民博における「弁当展」の展示構成と空間配置

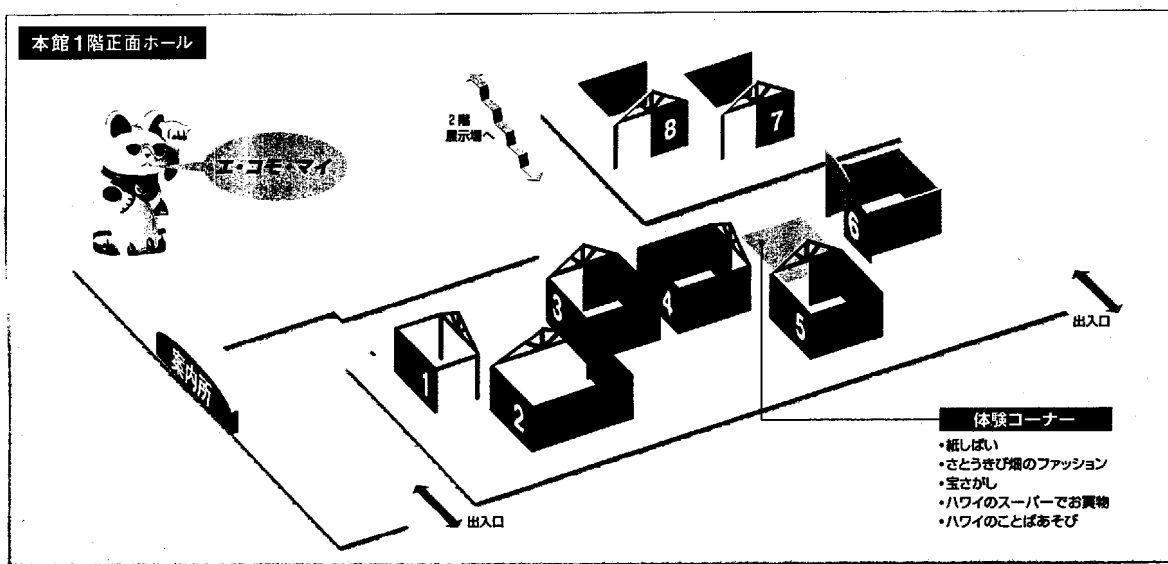
1) 8つの展示モジュール

「弁当展」は民博本館の正面ホール（通称、エントランス・ホール）を会場として利用した。この空間は2001年3月15日から無料化ゾーンとして一般に開放されるようになった。それを記念し、特別企画として「弁当展」が開催されたのである。ふつうは

大型手回しオルガンや椅子の並んだ休憩コーナーしかない空間に 8 つのモジュールが設置され、その中に展示物が陳列されたのである。

図 1 は展示リーフレットに掲載されたレイアウト図である。

<図 1> 本館 1 階正面ホールのレイアウト

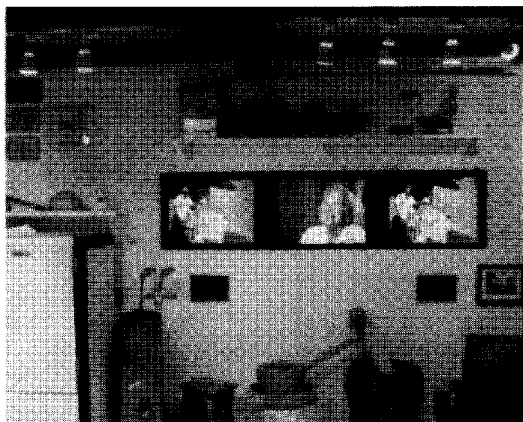


2) 展示モジュールのテーマ

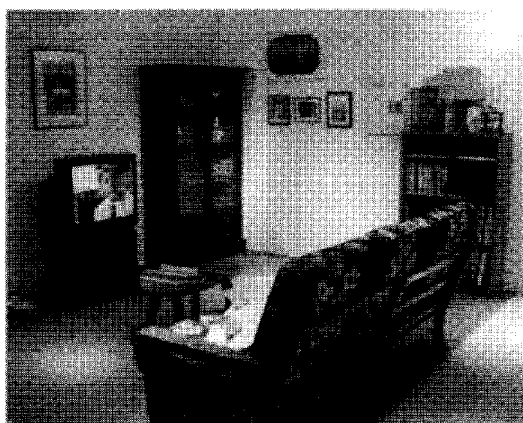
展示モジュールのテーマと主な展示品は次のとおりであった。展示場ではあらたに番号表示をつくって貼りつけ、順序にしたがってみることでハワイの日系人がたどった足跡を時代に沿ってたどることができるようにした。

- ① ハワイ日系人家庭のガレージ
- ② ハワイ日系人家庭の居間
- ③ 一世—真の開拓者達—
- ④ 出稼ぎから定住へ—新しい生活への適応—
- ⑤ 日本・アメリカ・ハワイの混合と〈ローカル文化〉の誕生
- ⑥ 二世の時代—民主主義の名のもとに—第二次世界大戦と日系二世
- ⑦ アメリカ国民として
- ⑧ 三世の時代—世代間の橋渡し—

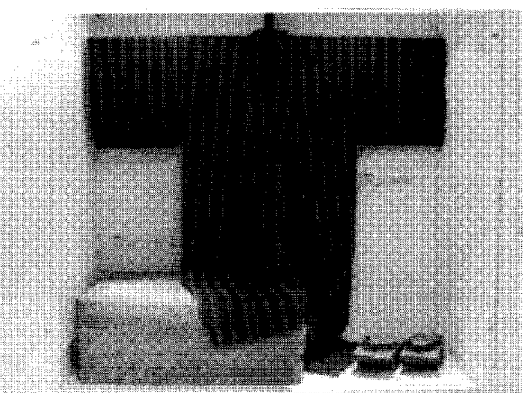
<図2> 展示リーフレットに掲載されたテーマと主要展示品



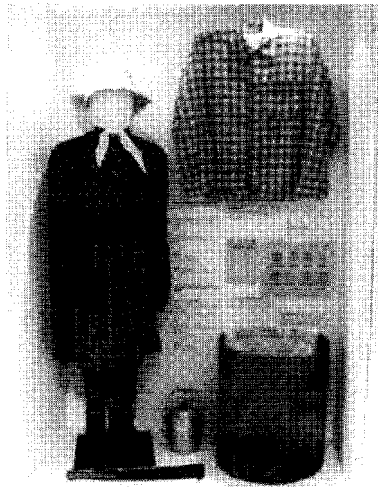
1 ハワイ日系人家庭のガレージ



2 ハワイ日系人家庭の居間
古き日本と現代ハワイが混在する空間



3 一世 — 真の開拓者たち —
一世たちの生活やサトウキビ畑での労働を紹介



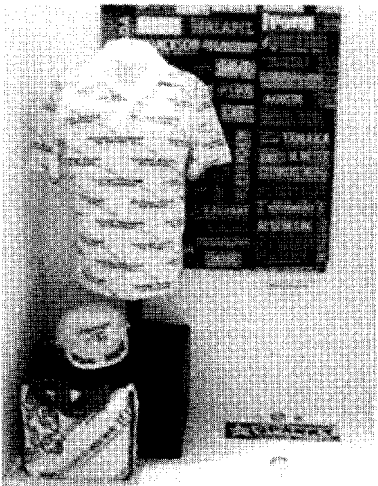
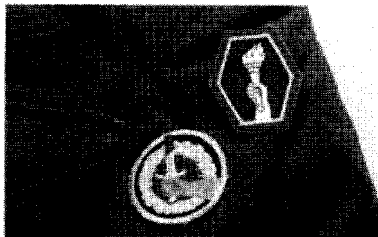
4 出稼ぎから定住へ
—新しい生活への適応—
—世代たちのさまざまな工夫



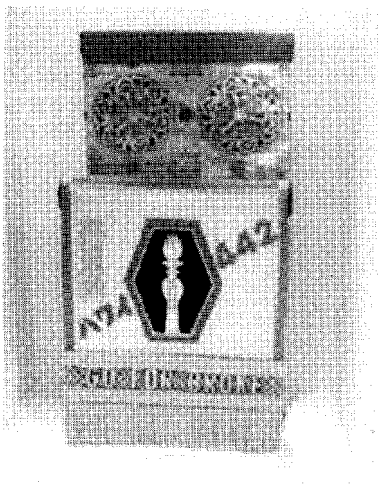
5 日本・アメリカ・ハワイの混合と
〈ローカル文化〉の誕生
日系二世のライフスタイル



6 二世の時代 —民主主義の名の下に— 第二次世界大戦と日系二世



7 アメリカ国民として
戦後の日系人たちの苦闘



8 三世の時代 —世代間の橋渡し—
多文化社会ハワイで生きる日系三世の活動

2. 学習プログラムとボランティア活動からの命題と教訓

学習プログラムは3種類用意された。それぞれ目的、対象、方法が異なり、実施期間にも差があった。

- ① 体験型教育キットを使用し、不特定多数の来館者を相手とする、ボランティア・スタッフによってになわれたプログラム（常時）
- ② 学校グループを対象とする博学連携の学習プログラム（単発的）
- ③ 「みんなくミックスプレートひろば」（夏休み）

①は全米日系人博物館の三木美裕教育部長が開発したキットをもちい、おもにボランティア・スタッフが老若男女の一般来館者に対して実施したプログラムである。第1章はその報告である。②は中央大学の森茂岳雄教授と東京学芸大学教育学部附属世田谷小学校の中山京子教諭によって作成されたカリキュラムをもとに、吉荒佳枝研究支援推進員が独自の工夫を加味しながら実践したり、森茂・中山の両氏が直接実施したりしたプログラムである。第2章がそれについての報告であり、沖縄での実践例も含んでいる。③は民博のCOE講師である佐藤優香研究員が独自に開発したフォーラム型の学習プログラムであり、おもに夏休みの親子や友人同士の来館者に対し、ファシリテーターを介してねんど細工に取り組んでもらうプログラムであった。このファシリテーターは民博のボランティアと博物館実習の大学生によって構成された。その報告が第3章である。

これら3種類の学習プログラムからわれわれは何を学んだのか。詳細は各章にゆずるとして、わたしが重要だとかんがえたことを4点だけとりあげてみたい。

まず第1は、展示とキットは相対的に独立して成り立ち、両者を媒介するのがフローアー・スタッフの大きな役割である、というものである。換言すれば、展示の主旨をそこなわない限り、キットはかならずしも直接的に展示の理解に資する必要はないということである。来館者の展示への参加を高めるのにキットはその導入として役立つのであり、展示そのものを理解させる必要はかならずしもない。大切なのは、三木氏が強調するようにキットをとおして会話がはじまることである。そして会話がはじまるためには人が介在しなくてはならず、ボランティア・スタッフの役割がそこに求められている。

展示とキットの相対的独立はフローアー・スタッフに工夫の余地をあたえ、ユニークな展開に道を開く効果をもっている。たとえば、「ハワイにわたった日系移民」と「弁当からミックスプレートへ」という紙芝居はそれ自体で完結したキットだったが、ボランティアのなかにはハワイ語やハワイで日常語と化した外来語のキットをつかってたくみにパフォーマンスする人があらわれた。かれは複数のキットを関連づける方法を開発したのである。そして、それがまた結果的に展示の導入として役だった。このようにキットが展示とゆるやかにつながることで、フローアー・スタッフの自由な創意工夫を誘発することが可能となる。

第2は、キットや学習プログラムの担い手は館のスタッフであれボランティアであれ上達するし進化する、という点である。展示やキットのマニュアルがあってトレーニングがなされたとしても、来館者との会話のやりとりはマニュアルどおりにはいかない。また、マニュアルどおりでは飽きがかかる。来館者が異なれば、当然会話もちがった内容

となる。そこに新鮮さもあれば、上達や進化のきっかけもある。ここで上達や進化という概念をつかっているのは、前者がモデルやマニュアルにしたがって完成度を高めていくのに対し、後者には質的な変化を想定しているからである。ベテランの域に達した人はキットや学習プログラムを自由自在につかひこなせるだけでなく、それらを組み合わせたり、さらにはあらたな構想にもとづき新規のキットやプログラムを企画したりすることが可能になるということである。言い換えると、展示には上達や進化はないけれど、スタッフにはそれがあり、それが展示に息吹をふきこむ大切な役割をになっているということである。

三木氏が会期の途中でキットを追加したことは示唆的である。これはキットの充実をはかると同時に、ボランティアに飽きをこさせないための工夫であった。「弁当展」での学校向けの学習プログラムは実施回数が少なく、対象も異なっていたため、飽きや慣れが問題になることはなかったが、常設展示で長期間にわたって展開する時には特に留意すべき点であろう。

第3には、博学連携の学習プログラムは事前授業、博物館見学、事後学習、さらには学園祭にまで展開が可能であり、時間をかけて取り組むような展示テーマにふさわしい、という点があげられる。「弁当展」は移住と多文化共生というテーマを掲げており、一度の博物館見学で生徒に十分租借できるような展示内容ではなかった。したがって、事前・事後の学習はおおいに効果があったようであり、ひとつの望ましい学習のあり方を示しているようにおもわれる。また、学習プログラムを実践した7校のうち2校が学園祭で「弁当展」をとりあげたことは予想外であった。2002年度から本格的に導入される「総合的な学習の時間」では博学連携の学習プログラムが注目されるであろうし、博物館側としても積極的に取り組まざるをえない状況が想定される。今回は7校中3校が総合学習としての位置づけをおこなっていた。

第4には、交流の場としてのフォーラム型の展示にキットや学習プログラムが大きな役割を果たしうる、という点である。フォーラム型の展示のめざすところは、佐藤報告の冒頭で引用されているくだり、つまり『対話』によって『自己』と『他者』が同じ時空間を共有しつつ、ともにわずかずつつでも変わっていくというありかた（吉田憲司）である。「みんなくみックスプレートひろば」ではファシリテーターを媒介に親子や友人、さらには来館者同士での交流が深められた。これは吉田が想定する「展示をする側」と「展示をされる側」との対話や交流とは多少異なるけれども、ワークショップというような、展示をする側とされる側との相対的で双方向的な参加形態において、かなり威力を発揮することが実証されたようにおもわれる。

3. 学習プログラムとボランティア活動への展望

民博のみならず日本の博物館は一般的に、展示は解説パネルやリーフレット・図録などの文字情報に依存して解説されてきた。映像による解説も補助的な役割にとどまることがおおく、人を介した展示の楽しみ方については未開拓のままにおかれていた。しかし、たんに宝物を見せるような展示から、展示をとおして人と人とがコミュニケーションをはかるような展示へと脱皮していく必要性はますます高まっている。佐藤報告で引

用されているように、D.キャメロンの用法を借りれば、テンプル型の展示からフォーラム型の展示へという方向になる。

そのフォーラム型の展示を指向するとすれば、準備段階における「展示する側」と「展示される側」との交流は言うに及ばず、展示をめぐるコミュニケーションをはかるためにそれなりの仕掛けと人材が要請されてくる。学習プログラムとボランティア活動はその場合の不可欠の要素となってくるにちがいない。

民博の「弁当展」における学習プログラムとボランティア活動の取り組みは4ヵ月という限られた会期での実践にすぎなかったが、そこから学んだことを今後の展示にかしていくことはわれわれに残された課題である。以下に収められた4つの章がその指針となるばかりでなく、似たような課題をかかえている博物館や美術館にとっても何らかの参考になれば望外の幸せというほかはない。

